

# 中西部アフリカ・ベトナムの 幼児教育関係者との出会い

浜口順子

二〇〇六年の秋から冬にかけて、お茶の水女子大学では、遠くアフリカ（JICA地域別研修中西部アフリカ幼児教育）とベトナム（科研海外調査・日越幼児教育共同セミナー）から幼児教育関係者の方々を迎えて研修プログラムをもった。訪日団には連日、日本の幼稚園・保育所や総合施設の視察のほか、幼児教育・生涯発達・小児保健・比較教育・子

どもの権利など、さまざまなテーマの講義も用意されていた。その中で私は、日本の現在の幼児教育理念と方法について、アフリカ・ベトナムの方々に向けてそれぞれ二時間ほどの講義をする役割を与えられた。

幼児教育の交流とは何なのか。もとより、日本の幼児教育が先方の国々よりも「優れている」から

彼らを迎えているわけではなからう。私は何を講義するのか？ 間に横たわる文化の違いをふまえないと互恵的な交流は不可能だと戸惑いをもちながら、それでもどこか、人間だったら通じ合えるのではないかという淡い期待をもって臨んだ。

### 中西部アフリカの方々と共に

セネガル、ニジェール、ブルキナファソ、マリ、カメルーンの五か国から、就学前教育行政官、幼稚園視学官、教員養成校の教師、幼稚園園長が総勢十五名来訪した。研修概要資料には、「現在、サハラ砂漠以南地域は、五歳未満児死亡率や栄養失調・罹患率が非常に高い現状にあり、喫緊に解決すべき問題となっている」とある。国際社会で就学前教育の拡大・改善の必要性が認識され、支援体制が強化されている中で、「同地域では乳幼児開発すなわちE

CD II Early Childhood Development に関して、各国政府の強いコミットメントと確固とした政策は示されておらず、その位置づけが不明確であるのに伴い、同分野の専門的人材が圧倒的に不足している」という。この説明の中にある「Development」という言葉が「発達」ではなく「開発」と訳されることの意味を、深く受け止めなければならぬと思った。

講義当日の朝、地図帳で五か国の位置を確かめてから臨む。通訳はフランス語だった。半数が女性だったが、褐色の肌に明るい色の民族衣装が非常に美しかった。私の役目は、日本の「子ども中心的教育」について「説明」することのだが、おそらく想像を絶するほど異なるだろう文化の違いを予感し、とにかく人間として共感し合える部分を探したい、ということが終始一貫した私の願いだっただけで、互いに親しみを感じることが大切だと思っただけ

で、自己紹介で「私は幼児教育を研究しているが、三人の子どもの母親でもあるので、母親としての幼稚園・保育所の経験についても、質問してくれれば話すことができると思う」と話すと、参加者のみんながほっと和んで笑顔になってくれた。私も安堵した。親であるということを武器にはしたくないと日ごろ思っているが、こういう時はすがりつきたくなかった。

幼児教育事情の隔たりは大きく、五か国の中で最も幼稚園就学率の高いセネガルでも3.3%（二〇〇一）であり、二〇一〇年までに30%に引き上げることが目指している。保育者養成の期間は七か月、教育内容は教育・保健・栄養の三本柱から構成されており、理論と実践（実習）を二時間ずつ繰り返す形。カナダの支援で教員用マニュアルを作成中とのことである（フランスの影響も強いらしい）。

子どもの主体性や教師の子ども理解について話す中で、倉橋惣三の「育ての心」に言及したが、どのよ



うに理解されているのかをつかむのは難しかった。たとえば、「驚く」ことの大切さについてセネガルの男性から「驚くということは大切だ。われわれも動物を見て驚くということを取り入れて、教育のカリキュラムを考えてみている」と言われた。

一面的に伝わっていると思い、「確かに子どもの驚きは学習に欠かせないが、倉橋においては大人のほうが驚くということをも意味している…」という説明を補っていった。倉橋の概念は特に翻訳が難しいに違いない。その日の通訳の方は教育の専門の方ではなく大変苦心していただき、アフリカの方々もとても一生懸命に耳を傾けてくださった（事務局の

話では、イスラム教徒の方はちょうど断食の時期に入っていて、日中は食べ物を口にしないので疲れやすい、ということだった。

ある女性が、「日本では動物を飼育しているのちの大切さを教えているようだが、アフリカでは、家畜と一緒に生活している。また社会性を育てるために幼稚園に行くとはいっても、大きな家に行くつもの家族が同居して、たくさんの子どもたちが家の中でひしめき合っているから、家においてたくさんの子どもと遊んでいる」と発言すると、参加者に活気がみなぎり、私も皆さんと一緒に笑ってしまった。ここが大切な点なのではないだろうか。こちらの教育制度・方法を伝えるだけでは仕方のないことを考えさせられた。「子ども中心な保育法」というのは、経済・社会の構造的変化に伴って歴史的に形成された人間観のもとで生まれてきたものであって、

決して普遍的に正しい唯一の視点であるわけではない。一人ひとりの子どもの話をすることから、接点を見つけていく必要があると思った。

### ベトナムの方々と

ベトナムからのお客様は三名で、みなハノイ師範大学幼児教育学部の教官である。一人だけ男性のタイ先生は前学部長、ホア先生は副学部長、フォン先生は学科長とのことだった。「子ども中心な教育」については非常に関心が高くなっているので、相互に話し合えるような講義を要請された。

抗仏戦争（一九四六～五四）、ベトナム戦争（一九六五～七二）と長く戦場となった歴史の中で、女性を戦時体制に動員するという国家的要請から、保育所が多くつくられ、幼稚園は一九六三年に初めて開設された。一九八七年以降幼保が一元化され、

三歳未満児の就園率は12%（二〇〇〇）、三〜五歳は50%、五歳児は81%と高い（初等教育就学率は95%）が、地域の格差が大きいという。中等職業校の一種である師範学校（三年課程が主流）で主に保育者養成が行われており、師範大学で教員養成者の育成をしている。

日本の幼稚園教育要領のコンセプトについて一通り話し終えてから、次のような質問が出た。「ベトナムでは子ども中心ということを理論では学んでいる。しかし、現場に入ると『させる』教育になってしまう。教員養成が最も難しいが、どうしたらいいだろう」という。私は自分自身の経験から、たとえばこんな授業はどうだろうかという三つのヒントを話してみた。まず一つ目は、学生に「子どものイメージ」を聞いてみる。日本では「かわいい」とか「素直」というのが多いのだが、それらのイメージ

には、子どもを低く見たり従順であったりすることが望ましいというような価値観も見え隠れしているのではないかと考えていく。この話に、ベトナムの先生たちは大いにうなずいてくれた。

二つ目は、自分の子ども時代のことを思い出し、みる。大人になってみて考えると取るに足らないことだが当時は真剣だった体験に思い当たる。この話をする際、江波諄子氏の『キーウェイデインの回想』にある詩がとても役に立った。お漏らしをして困っている友達をかわいそうに思って、自分もお漏らしをしたこととして一緒に先生に言いに行ったところ、うそをついてはいけないと叱られる子どもの話。お絵かきの時間、楽しかったお散歩を思い出しながら、お日様が笑っている顔を描いたら、先生に「太陽は笑いませんよ」と注意をされ、ふに落ちない気持ちになったという経験……。このたとえ話に

は、ベトナムの方々もますます身を乗り出して聞いてくださった。

三つ目は、障害のある子どもと遊んでみる体験をもつということである。障害のある子どもと向かい合うと、通常よりも深いところで相手の気持ちを感ずるとるコミュニケーションの必要性に迫られる（健全の子どもとの間でもそのようなコミュニケーションを心がけたいものだが）。そのためには先入観やこちらの意図などを一度取り払って子どもに出会う必要に迫られ、型通りの子ども観を反省せざるをえなくなる。近年の日本における、軽度発達障害や特別支援教育への関心の高まりが、一方で「障害」児と「健全」児を分け隔てる風潮に流れかねないことを危惧すると話すと、ベトナムでも最近、そのような傾向が顕著になっているという話であった。

その他、保育者と子どもがそれぞれ主体的に出会

うという問題についても、こちらが一方的に説明するのはなく、質疑を互いに向け合うという話し合いができたことがうれしかった。話していて通じているという感覚があった。ベトナム語の通訳の方も一緒に楽しんで考えてくれたような気がする。つながりを感じられた幸せな時間だった。

（お茶の水女子大学）

#### 参考

- 出口真弓 二〇〇六「ホーおじさんのよい子ども」を育てる幼児教育 池田充裕・山田千明編著『アジアの就学前教育』明石書店 八二―一〇三ページ
- 箕浦康子・矢田美樹子 二〇〇六「ベトナムにおける就学前幼児のケアと教育」（報告書）
- 江波諄子編 二〇〇五『キーウェイデインの回想』新風舎